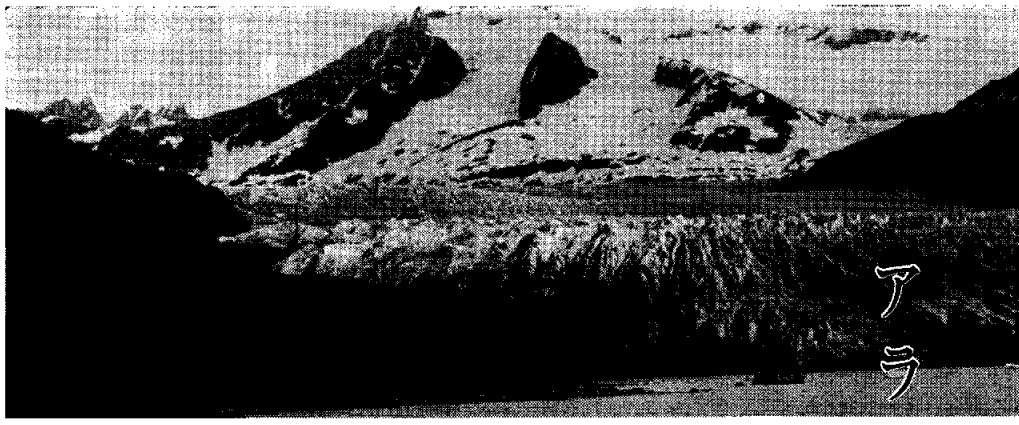

写真は　メンデンホール氷河

アラスカの自然保護

東　晃

自然が美しく保護されるためには、それを保護することがいかに重要であり、またそれはどういうふうに行なわれなくてはならないかを、じゅうぶんに人々に知ってもらう必要があろう。そのためのPRということ、またふだんの学校などでの大事であるが、やはり自然を保護されている地域、すなわち国立公園などの現場での一般人に対する指導ということが、目下緊急の必要事であろう。

ことに最近のわが国の、いわゆる観光開発の急速な発展をみると、この点に大きなおくれのあることを痛感せざるを得ない。それで、そのような指導がアメリカの国立公園や国有林でどのように行なわれているかを、筆者のアラスカ旅行のせまい経験を通してではあるが、少し書いてみることにしよう。

筆者らが一九六〇年と六四年の二回にわたり、氷の巨大単結晶採取と氷河調査に赴いたメンデンホール氷河は、アラスカのトンガス国有林の中にある。米国農務省林野局（フオレスト・サービス）の管轄下にある。この東南アラスカの森林は、慎重な計画の下に伐採と天然更新が進められているアメリカの大きな森林資源である。近年、日本のアラスカパルプがシトカに工場をつくって現地企業に進出したのも、この国有林の材木払い下げを受けられたからなのである。

メンデンホール氷河は、アラスカの首都・ジュノーからグレイシャー・ハイウェイと名ずけられているりっぱな道路を車で走ること約三十分でゆけるところにある。氷河の末端にある氷河湖の水をこえて、末端の氷崖を指呼の間に望み見ることができるところで道路は終っていて、駐車場がありその上の羊背岩の上に「氷河展望台」のガラス張りの円型の建物がたっている。

この建物は、一九六〇年に私達がメンデンホール氷河の調査に行ったときにはなかった。道路の末端に砂利敷きの粗末な駐車場があり、そこに案内標示板と来訪者名簿のはいっている小さな箱があっただけだった。それが最近の増加する観光客の便を図って、フオレストサービスによって、こういう建物ができたのである。建物はフオレストサービスが管理していて、屋上に星条旗が立っている。中にはいってみると、まず入口のところにパンフレットを立てたボックスがある。ご自由にお持ち下さい、というこのパンフレットは、大変りっぱなものである。これについては、あとで書くことにしよう。

氷河の側に面した円型の約半分は広いガラス張りで、氷河の景観をじゅうぶんに楽しめる。望遠鏡が二台立ててあって、氷河の上の遠くを見ることもできる。すぐ右手にあるバラード山の山頂附近によくマウンテイン・シープの群がいるのを見ることもできたし、あるときは、対岸のマクギニス山の斜面に熊がいるのを見つけて面白がったこともあった。

ここにやってくるのは、夏の間はたいてい東南アラスカの観光旅行にくるアメリカ本土の人達である。家族づれで自分の車を運転してくる人々、カナダのプリンス・ルパートから東南アラスカの沿岸をめぐって

ヘインズやアンカレジにゆく観光船にのってきたお客さんなどである。観光船がジュノーの港にはいって、お客さん達がバスにのってやってきたときなどはなかなかの賑いである。そういうときには、濃緑色のユニフォームを着たフオレスト・サービスの若い人がでてきて、氷河についての説明をする。

ガラス窓の右側の端のほうにこの附近の山と氷河の模型が作ってあって、この氷河が、ジュノー氷原といわれる大きな雪と氷の原から谷へとあふれ出たものであることがわかるようになっている。それと実物とを指し示しながら「この末端に見えている氷は、約二百年前に源流で雪として降ったものなのです」とか、「一八〇〇年代の終りにはこのへんはもちろん、いまの湖のかなり下まで氷におおわれていて、氷河はずっと前進していたのですが、最近はずっと後退の一途をたどっているわけです」とかいったような、かなり専門的な説明を一席ぶってくれる。

こういう仕事をしている若い人が三人くらいいるのであるが、ある日、その中の一人が、この展望台とは湖の反対側のキャンプ場にベース・キャンプを作った私達に薪やガーベージ・カンを持ってきてくれて、しばらく話しこんで行った。それでわかったことなのだが、このいかめしい制服を着てツバの広い帽子をかぶった三人は、夏休みの学生アルバイトなのであった。この人はインディアナ州パーデュ大学の大学院学生で、昨年はミシガン大学のミラー博士がジュノー氷原でやっている氷河学の夏期大学に参加して、氷河とアラスカのとりこになってしまい、ことしはフオレスト・サービスにアルバイトの口を求めてやってきたのだということであった。

土木地質学を専攻しているというこの人は眼鏡をかけてやせているが、こういう仕事をしているときの態度はりっぱでたのもしい。日本の大学生のアルバイトだったらとてもこうはゆかないだろうと思った。だいいち、こんな制服を着せられて大勢の人の前でしゃべるなんてことは、てれくさくてできないだろう。アメリカでは夏休み三カ月の仕事もりっぱな職業で、それなりの給与もよいし、大学生のほうもその間は真剣に仕事にとり組んでいるようである。

夏休みに、涼しいアラスカに来てきれいな景色を眺めながらアルバイトするなら、大変楽ないい仕事のように思えるが、真剣にやるとなると大変なことである。交代でこの展望台に勤める間に中・高校生のキャンプの指導にもゆかなければならない。このキャンプ場は、メンデンホール氷河の北

どなりにあるイーグル氷河の下にあってジュノー近辺の中・高校生が交代でかなり長期間行なっているようだった。

そこで、この若い森林官達は、国有林の保護や氷河の科学の講議をしたり、実際の見学指導をするのである。だから彼らは、動植物から地質学にいたる広い勉強をしなくてはならない。こんどは、テープ・レコーダーを持ってくるから、メンデンホール氷河の様子や、氷河調査の意義をよく話して下さい、ともいっていた。こんな教育をしてもらえば、受けとる側の中・高校生のほうにも、自然保護のことはよく理解されてゆくに違いない。

わが国でも中・高校生のキャンプなどは楽しみ本位でなく、こういう教育がじゅうぶん考えられてよいのではないかと思われる。また、そういうキャンプの指導者として、大学の林学、生物学、地質学などの学生諸君に自然保護の理念や、実際を勉強してもらうこともすぐにできそうに思えるがいかがなものだろうか。もちろん、自然保護学科のようなものも望ましいことに違いないが、大学で自然科学、とくに自然史を学ぶ学生には、全部がそういう視野をもってほしいものである。

「氷河展望台」の入口においてあるパンフレットには、数種類ある。「メンデンホール氷河」「氷河への林道」「トンガス国有林」などである。「メンデンホール氷河」は、氷河末端から、上流のセブンシスター山までを望遠レンズでとった写真が表紙になっている四つ折りのパンフレットであるが、内容はなかなかりっぱである。

紙の四分の一をついやして、氷河の生いたちを書いてあるが、かなり程度の高いことを専門的に見ても間違いなくのべてあって、氷河がジュノー氷原につもった雪に由来していること、長年月の間に気候の変化により前進後退をくりかえすこと、最近の変動がモレーンや湖にどう現われているか等々、氷河についての概念が手ぎわよくまとめられている。その後、展望台の説明や行事、森林官はなんでもご説明します、というようなことから、キャンプ場の案内、ハイキング用の林道のことが出ている。

「氷河への林道」は、この展望台から氷河の東岸についているハイキング用の林道沿いに見られる、いろいろな氷河地形を説明した三つ折りのパンフレットである。林道沿いに立てられた九カ所の案内標示の場所場所で見られる羊背岩の様子、氷河の後退縮少を示す森林線、ドラムリン等々について、生因や最近の動きを解説してある。このパンフレットを持って歩いてごらんなさい、というわけである。最近わが国でも

自然遊歩道が二、三の国立公園内に設けられるようになったと聞いているが、こういう案内書は、自然を知るうえにはなはだ有効であろうと思われる。

「トンガス国有林」はひろげると八五×四五センチの地図になるもので、表は東南アラスカの大部分（約千六百万エーカー）を占める国有林の地図で、キャンプ場の番号がはいっている。裏側にこの国有林の概況、その地域の地理、交通、氷河、動植物、インディアンの説明が写真入りでのっており、さらに狩猟・釣・キャンプの注意がのっている。

こういうパンフレットがみな大変きれいにできていて、しかも内容が程度の高いものであることには感心させられた。費用もかかることではあろうが、やはり、自然保護の指導やＰＲに関する政府機関の考え方がしっかりしていることを表わしているのではないであろうか。

また一方では、それを受けとる側、観光客やキャンパーの関心が、本当に自然を愛し、科学的な興味を抱いているからこそ、こういうパンフレットも生きてくるのであろう。景色を眺め、キャンプを楽しむのに科学的関心を抱くことがなんの邪魔にもならず、むしろ当然のこととされていることは、日本のムード的観光旅行とくらべて考えさせられるものがある。

これらのパンフレットの終りには必ず、さらに詳細を知りたい方はジュノーの林野局にお問い合わせ下さい、とある。ジュノーでは林野局であまりゆっくりしらべる間がなかったのであるが、帰りにアンカレジの町で政府刊行物を扱っているところで見たところ「シトカスプルース」「アラスカ樹木ポケットガイド」などという樹木の解説、森林保護の必要性を訴えたパンフレットなど実にたくさんの刊行物が出されていた。またこれは地質調査所のほうから出たものであるが、その年の春にあったアラスカ地震の解説書などのあるのを見てその素早い仕事ぶりにおどろいたものであった。

アラスカの国立公園の一つ、カトマイ火山で約一週間を過ごしたので、国立公園の管理についても知ることができたが、これについてはもう紙数がなくなったのでやめることにしよう。もちろん、アラスカのように人の少ないところと北海道のような多くの人のゆける場所とでは、自然保護の理念も方法も違うかも知れない。しかし、たとえば支笏洞爺の国立公園でカルデラの生因や火山の勉強のできる、科学的なパンフレットに、人々の関心が集まるというようなことを望むのは無理というものであろうか。

（北大工学部教授）